神様の贈り物

KAMISAMA NO OKURI MONO

木内一裕

KAZUHIRO KIUCHI

講談社

講談社文庫

神様の贈り物

木内一裕

講談社

|著者| 木内一裕　1960年福岡生まれ。'83年、『BE-BOP-HIGHSCHOOL』で漫画家デビュー。2004年、初の小説『藁の楯』を上梓。同書は'13年に映画化もされた。他の著書に『水の中の犬』『アウト＆アウト』『キッド』『デッドボール』（すべて講談社文庫）、『喧嘩猿』（講談社）がある。

神様の贈り物
木内一裕
© Kazuhiro Kiuchi 2014

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2014年6月13日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社デジタル製作部
印刷———豊国印刷株式会社
製本———株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277855-8

神様の贈り物　目次

第一章 ―― 7
第二章 ―― 81
第三章 ―― 157
第四章 ―― 227
エピローグ ―― 300
解説　ギンティ小林 ―― 304

木内一裕／きうちかずひろ公式フェイスブック
http://facebook.com/Kiuchi.Kazuhiro.BeBop

KAMISAMA NO OKURI MONO
KAZUHIRO KIUCHI
KODANSHA BUNKO

講談社文庫

神様の贈り物

木内一裕

講談社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

神様の贈り物　目次

第一章 ―― 7
第二章 ―― 81
第三章 ―― 157
第四章 ―― 227
エピローグ ―― 300
解説　ギンティ小林 ―― 304

木内一裕／きうちかずひろ公式フェイスブック
http://facebook.com/Kiuchi.Kazuhiro.BeBop

KAMISAMA NO OKURI MONO
KAZUHIRO KIUCHI
KODANSHA BUNKO

私にとっての大切な存在だった田宮一氏へ、感謝を込めて――

田宮さん、あなたの〈いい加減〉っぷりは私の憧れです。

神様の贈り物

第一章

KAMISAMA NO OKURI MONO

KAZUHIRO KIUCHI

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

「あんた、なんでチャンスって呼ばれてんだ？」
柾木（まさき）が言った。助手席の男に反応はない。
「シカトかよ」
その言葉にようやくチャンスが振り向いた。
「ん？」
「なんだよ、聞いてもいねえのかよ」
柾木は吐き捨てるように言った。
「なにが？」
チャンスがいつも通りの無表情な顔で見つめてくる。まったくこの野郎にはいつもイライラさせられる。
「知らねーよ。いいから好きなだけ窓の外眺めてろよ」

アクセルを踏み込み、目の前をトロトロ走るプリウスを躱して前に出る。チャンスは元のように窓の外に目を向けていた。だが目の前を流れ去る景色を見ているのではないことは柾木にはわかっていた。こいつはなにも見ちゃいねえ。いや、見えているものがなにも頭に入っていやしねえ。こいつはそういう奴だ。

チャンスと仕事をするのはこれで三度目だ。初めてツラを合わせたときから気に喰わねえ野郎だった。なにが楽しくって生きてんだかわからねえ。世の中の全てに関心がねえっていうようなツラしてやがる。年齢は四十を過ぎたぐらいだろう。柾木より確実に一回り以上は年上だ。当然仕事の上でも大先輩であることは間違いない。だが柾木はチャンスに敬意を払う気にはなれなかった。

なにがこうも柾木をイラつかせるのかはわからない。とにかくリズムが合わない。そもそもこの男にリズムなんてものがあるとも思えなかった。なにを言ったって笑いもしなけりゃ怒りもしない。四六時中ぼーっとしてるだけの、木偶の坊にしか見えなかった。

目白通りから高速に乗り、そのまま関越自動車道に入る。カーナビの画面が目的地への到着時刻を12時17分と告げていた。環八が渋滞していたせいで予定よりも遅れている。柾木はさらにアクセルを踏み込んだ。

チャンスの横顔を盗み見る。割りと整った風貌をしている。それだけに心がどこかに行ってしまったようなぼんやりした顔が余計マヌケに見えた。

なんでこんな野郎がこの仕事をやっているのか理解できない。どう見てもこの仕事に向いているとは思えなかった。

「だけど腕は一流だ」

いつも柾木に仕事を回してくるヨモギダという親爺がそう言っていた。

「お前はしばらくチャンスにくっついて勉強させてもらえ」

そのひと言でチャンスと組むことになった。拒否することは許されなかった。

藤岡ＪＣＴから上信越自動車道に入った。

相変わらずチャンスは身動きひとつせずに窓のほうを向いている。眠っているのかと顔を覗き込んでみたが、目は開いていた。

過去二度のチャンスとの仕事は勉強もクソもなかった。チャンスの仕事ぶりを目にすることがなかったからだ。柾木はただの運転手にすぎなかった。現場までチャンスを運び、一旦現場を離れる。そして仕事を終えたチャンスを素早くピックアップして現場から立ち去る。それだけだった。どちらも一人で充分な仕事だったからだ。

だがきょうの仕事は違う。最低でも二人は必要だし、慌てて現場から逃げ出さなきゃならない理由もない。しかし、だからといって柾木はチャンスに勉強させてもらう気など欠片もなかった。チャンスに俺の力を見せつけてやる。そう思っていた。

碓氷軽井沢ＩＣで高速を降りて県道九二号線に入る。それからはひたすら山の中の道を走り続けた。カーナビの到着時刻は11時57分にまで縮まっていた。

県道四三号線を経て南軽井沢の別荘地に入った。しばらくカーナビ任せに走っていると、目的地付近に到着したことが音声で告げられた。柾木は周囲の別荘風の建物の外観をチェックしながら進んだ。やがて前方左側の白樺の林の奥に、尖った屋根の洋風の建物が見えてきた。

「あれだな」

チャンスに声をかける。チャンスはすでにその建物を見つめていた。

柾木はゆっくりとその建物の前を通り過ぎ、しばらく進んでから脇道に入って車を停めた。

あの別荘には関西のヤクザの組長がボディガード三名に護られて隠れている。その組長が最高幹部を務める大組織で内輪揉めが起こり、組織を割ろうとした組長は本家から命を狙われるハメになっちまった、ということらしい。

いまの世の中、ヤクザといえども組織的な暴力行為は外部に委託するしかなくなってしまっている。暴対法で組織のトップが使用者責任を問われるようになってからは若い衆をヒットマンとして飛ばすわけにはいかなくなったからだ。だがそういった状況の変化は、結果的にヤクザ組織にも多大なるメリットをもたらした。組員に殺人を命じると、長い懲役に行った組員の留守家族の面倒を見なければならない。そして出所後の組員の立場を保障しなければならない。これらには莫大な出費が必要となる。しかし外注ならばそのコストは大幅に削減できた。

さらに組織の構成員から凶悪事件の逮捕者を出さずに済むということは、いまの世の中にヤクザ組織を存続させていく上で重要な意味を持っていた。度重なる法改正に締めつけられるヤクザ組織は、犯罪行為を抑制する方向にではなく長い年月をかけて信頼できる委託業者を育成することのほうに力を注いできた。いまでは各有力組織はそれぞれ独自の委託業者を抱えている。そんな業者の一つに柾木は所属していた。

柾木の携帯が鳴り出したのは、待機に入って二十分ほど経ったころだった。

「はい」

「ああ、吉岡やけど、天せいろのそば二つと鴨せいろのそばとうどん一つずつ、あと山菜おろしそば揚げ玉多めで一つ……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com